
世界ってすばらしいのかなぁ？

音舞羅 阿瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界ってすばらしいのかなあ？

【Nコード】

N9462K

【作者名】

音舞羅 阿瑠

【あらすじ】

さて、何を話そうか。

あ、そうだ僕の旅の話をしよう。

そして知ってもらいたいんだ

世界のすばらしさと、その裏にかくれた悲惨さを

ブログ

世界ってどんなのだろう
すばらしいもののかな？

自分が生まれ育ったところを離れるってどんな気持ちだろう

考えるとわくわくする

そついうわくわくやどきどき感って

なんかいいものなんだなと僕は思うな。

??????

「ねえ、ねえってばあつ」

「ん・ふあゝ・おはよー」

今話かけてきたのは、僕の時計だ。
名前はクロ。

そして僕は一人称が”僕”だけど一応女の子
名前は”秋野 恵”一ひあきのめぐみ

「おはよーじゃないよ。もう12時なんだからあ旅人はもうちよ
つと早く起きないとね」

そう僕は旅人。

世界を夢みて家を飛び出した旅人

これからいくつかの国に旅に出る。

プロローグ（後書き）

さてとーw

もう完結してる処女作を公開っ！

（旅の始まり）世界に想いをさせる中学2年女子

「めぐみーっ？」

今話しかけてきたのは時計のクロ。
喋る時計なんだよね。

「なに？僕旅の支度で忙しいんだけど」

そう僕は旅の支度をしている。
昔から世界に出てみたいと思っていたから、今日はその実行の日。
早朝に起きて、僕は荷物を鞆につめている。

「ほんとに自転車で旅にでるの？」

「そうだよ。自転車だね。エネルギーはさ足でこぐ動力じゃなくて
念力使えばいいんだし」

そう。いまどきの自転車は運動の動力ではなく
念力という精神力を使う。

これも疲れるといえれば疲れるんだけどね

「いや、それでも疲れるからね？」

「じゃあ君はついてこなくていいの？」

僕はクロに問いかける。

クロは行くつ　とあわてて返事をした。

「じゃあ、文句いわないの」

僕は支度をだいたい終え、家をでた。

親はいないからそろりと出る必要はない。

そして自転車にまたがり、荷物をつりさげて走り出した。

これからどんなことがまっているんだろう。

これが旅のはじまり

「行こう。クロ、これが僕らの旅の始まりだよ。」

（旅の始まり）町をぬけて

僕は自転車を念力で走らせた。

念力というのはエネルギーのことだ。

エスパーのことではない。

「気持ちいいねえー風が」

僕は率直な感想をのべた。

自転車の足場（？）に足を置き、自転車を走らせていると風をきるような感覚になる。

なんというかあ、こう、風が体にまとわりつくような感じ

「そうだねえーって僕は何も感じないけどさ」

「そうだね。クロは時計だからね」

僕とクロは笑いながら自転車で走った

まだ知っている街並みから抜け出せない。

自然がいつぱいのこの町。

早朝の日の光が微妙に葉っぱたちを照らす

僕は突然歌が歌いたくなつて、大好きな歌を口ずさんだ。

世界中探しても見つからない

どこ探しても見つからないって

そんな幸せを感じながら生きる

ことができたらしいな

でもそれは叶わぬ願い

幸せって気付かないもの

目には見えない

一体幸せってどこにあるのだろうと

探してみても見つからない

決して見えない、触れないもの

それが幸せなのだろう

自分にしかわからないし、自分だけの現実のことだって
やっと気付いた

世界中探してもみつからない
どこ探しても見つからないって

それはそうだろう

だってそれは君の君だけの現実なのだから

「また”自分だけの現実”？」

「いいじゃん。好きなんだからさ」

クロに少し呆れられた。

僕の歌はよくほめられる。

どうやらうまくいらしい。でも、これしか歌えないという

というよりこれしか歌う気にならないっていう変わった女の子だ

「あ、そろそろ知らない景色が出てきたよ。ほら」

僕は景色を見てみた。

確かにそれは知らない景色だった。

自然が豊かなのは変わらないけど

音楽教室や、図書館。本屋さんなど

僕が普段見慣れない建物がいっぱいだった

「わあ……すごい」

僕は思わずそんな街並みに見とれた。

やっと、やっと自分たちの町から離れたんだ。

「これが、僕たちの知らない世界だよ」

「まだ隣町に來ただけだね」

「でも、やっぱりいいよね」

僕たちは自転車をもう少し走らせた

（祭りの町）旅して初めて出会った人

「隣町ってだけでもすごい雰囲気ちがうよね」

クロが喋りかけてきた。

確かに自分たちの住んでいた町は自然しかないような田舎町だったけど

ここには町という感じの施設などがある。

「今ここどこらへんだろう」

「んーっとねー・・・あっ！居住区って書いてあるよ」

僕はクロに看板に書いてあったことを告げた。

どおりで家ばかりが立ち並んでいるはずだ。

となると、さっきのお店がいつぱいのところは商業区と言ったところなのだろうか

「ねえクローあっちの方なんかにぎやかじゃない？」

「ほんとだ。お祭りかなにかかな。」

僕は自転車を走らせてそのにぎやかなところに行った。

ー中心区ー

「ここは町の中心らしいね。でも、それにしてもにぎやかすぎるよね」

「ほんとだよ。普段からこんなににぎやかだったら体力がもたないよね

勉強だってみが入らないし」

「そういうことじゃないでしょ」

僕は笑いながらクロに突っ込みをいれた。
そして、そのにぎやかなところについたとき
人々は驚いた。

「ん。よそ者が珍しいのかなあ？」

「あ、あんたら、よそ者か？」

「そうですよー隣町から来ました。秋野 恵と、時計のクロです」

僕は懇切丁寧に自己紹介をした。

すると町人も丁寧に自己紹介してくれた。

赤坂 巡さんだそうだ。

「にぎやかですねーお祭りかなにかですかあ？それにしては屋台等
が出てないようですが」

「ああ、祭りじゃないんだ。ただ毎日が祭りのような町だね。ここ
は」

「毎日お祭りって、さっき僕が言ってたじゃん」

僕はそうだねとうけながした。

するとクロはむくれる。むくれるというのは時計なのだからよくわ
からないんだけどね

「どういことですか？毎日祭りって」

「体力持たないよね」

クロはさっきと同じことを言う。

僕は少しクロをたたいた。

「それはあー・・・あっ！いけねっ用事思い出したっ！
じゃ、秋野さん。またっ！」

巡さんはものすごい早口で言い残して
走り去って行った。

「なんだろう。すごい違和感があるんだけど」

「調べてみる？」

「そうしよう」

(祭りの町) 旅して初めて出会った人(後書き)

あとがきコーナー

えつとですね

この小説は初めて書いた小説でー
やろっと思えば延々と続けられるようなwww
感じですwはい

（祭りの町） 鳴かぬなら鳴かせてみせよう

「で、どうするの？」

ク口は聞いてきた。

「どうするって、んーとりあえず人に尋ねてみようよ」

「そうだね」

僕らはさっきの人の様子が変わったので

いろいろについて探ることにした。

「あの、すいません。どうして毎日が祭りなんですか？」

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あんた、旅人か？」

「すまねえがそれは教えらんねんだ。わりいな坊主」

走って逃げに行った。

「女の子に対して坊主はないよね」

「あははでも子供のことを坊主っていうんじゃないかな」

「そんなことはわかってるよ。ク□」

何人かにあたってみただけ

結局みんな走って逃げて行った。

よそ者に町のことを教えてはいけないのかな

「どうする？めぐみー」

$$\begin{array}{c} \neg \\ h \\ | \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \neg \end{array}$$

「あつ！そうであつ（にやり）」

「なんかいやな予感するんだけど」

「昔の偉人でさあゝ」
鳴かぬなら鳴かせてみせようなんちゃららう

てのあるじゃん?」

「ほととぎすね。それで?」

僕は腰にかけてある2丁拳銃の「パリノ」と「カルン」に手を伸ばした

「まさか・・・」

「そっ」御察しの通りでございまあーす
この作戦はあゝなずけてえー」

僕はかなりおどけて言う

「鳴かぬなら鳴かせてみせよう住人作戦っ!」
「普通だねー」

クロは呆れている感じで棒読みで言う。
確かに普通すぎるかなと自分でも思った
そして作戦の犠牲者は・・・

「巡さんはあーつと」

「やっぱりあの人犠牲者にする気?」

「人聞き悪いこと言わないのーっ」

僕はあたりをきよろきよろとみてさがす
目はいいい方だからすぐ見つかるだろう
あと人を探すのが得意なんだよね

「ううゝ・・・人多いいー・・・」

「そうだねー多いいーねー」

「あっ! いたあっ!」

僕は走りだした。

巡はこっちに気付いていない。
ラッキーだなあーと思った。

「あの、町のことについて詳しく教えてくれませんか？」
「だから・・・教えないと・・・どうなるかわかってます？」

僕はパリノとカルンを手に持ち、静かに人込みで隠れて見えないだろう

巡の足につきつけた。

「わ、わかったよ・・・ついてきな」

「話せばわかるじゃないですかあー」

「いや、話してないからね？かなり強引だからね？実力行使しちゃうからね？」

僕たちは案内されるままに歩いた。

クロは歩いているときずっとうるさかった。
しばらく歩くと関所のようなところにてた。
おそらくここから先はちがう国なのだろう

「よし、いいか。よく聞くんだ」

「はい」

(祭りの町) 鳴かぬなら鳴かせてみせよう (後書き)

よいしょー

へんなくぎりかたw w w

まーいいんだよb うん b

いやーw

なつかしいねほんと文章つたなさすぎ

めぐみは可愛いキャラだけど怖い一面もあるんですよっというところが
今回でわかったね

（祭りの町）毎日が祭り

「この町では毎日神様に何かの命を生贄にするという習慣があるんだ。」

「生贄、ですか？」「ずいぶんあれな話だね」「」

「そうだ。その神様というのがこの国の建国の神で、生贄にしないとものすごい罰があたるといわれている。」

ここまで聞いて僕はだいたい納得した

「だから生贄に。一つ聞いていいですか？」「ああいいよ」「

「生贄というのは命だと言いましたよね？人じゃなくてもいいんですか？」

巡は一瞬顔を曇らせて、言う。

「昔は家畜でもよかったんだ。だが最近町長が神のお告げを聞いたとかで・・・」

”生贄には人を捧げよとのことだ”と・・・」

「なるほど・・・それでなんでひとびとはあんなに騒いでるのですか？」

気になるのはそこだった。

ここまでならあんな風に騒ぐ要素はまったくない。

「人々は生贄になることをとても光栄だと思ってるのだよ。だからうらやましいだとかなんだとか騒いでるのさ。気持ちがいだろ？」

「あなたはそういう人達とは違うのですか？」

「ああちがうさ、こんなしきたりはいらなとおもってる・・・お

つと、あんましゃべるとだめなんだ。」

巡はあわてて口をふさいだ。

どうもあまりしきたりに関しての不満を言っではいけないらしい

「お話ありがとうございました。とても興味深かったです。」

僕はぺこりとお辞儀をし、礼をいった。

「なあ、あんたらこのしきたりをどうにかしてくれよ。」

「それはできません。僕は旅人。ただ通りすぎるだけの人間ですから勝手にしきたりに干渉してはいけませんし。」

巡は残念そうにうつむいた。

そうだよなとつぶやきながら町に入って行った。

「じゃあ、僕はそろそろ行こっか。」

「そうだね。なんか小説の案は浮かんだの？」

「まだだね。もっといろんな町や国を見て回らなきゃ」

「そうだね。じゃあ行こっか」

僕は自転車のストッパーを上げ、念力をそそいで走りだした。次の町に向けて。

（祭りの町）毎日が祭り（後書き）

おもったけどこの小説って
会話多いですね

描写が少ない気がします
今の小説は逆なんですけどね
描写等が多く、会話が少ないという

どっちもどっちですよ
会話は少なかつたらだめだけど
描写もしっかりしてなきゃだし

今後の為になりますね
過去の作品みるとここがどうかがよくわかります

では、今後も科学と意識や世界ってすばらしいのかなあ？
そして新作にも期待を

（機械の国）おいしい料理はっ！

「ねえめぐみーどうすんのさあ」

「んーとりあえずまっすぐ進もうよ。そしたら関所があったりするもんなんだよ。うん」

僕らが旅に出てから2年。

月日はながいものだ。2年たつてようやく旅に慣れてきたころ。

僕らはいろいろな国を転々としている。次向かうのはどんな国なのだろう

「じゃ、自転車早く走らせよう」

「そだね。」

念力で進む自転車。

念力とはエスパーではなく、エネルギーのことだ。

僕はストッパーをあげて乗り、足場に足を置いて念力を流した。すると自転車は地面すれすれ程度に浮かび上がり、走っていく。

「今度の国はおいしい料理あるかなあ」

「町にもよるけどね」

「わかってるよ。」

「今回は何日町に滞在するんだい？」

「1日間。一つの町に1日。一つの国に町は4つあるから計4日だよ
改まって聞かなくても最初からそうしてきたじゃないか」

そう。一つの町には1泊しかしない、そしてすぐ出発。そして次の町にも1泊・・・
という風になっている。

国によって特徴はことなるけど町はさほど変わらないのでこれだけで十分なんだ。

ちなみに今走っているのは大草原。緑の海だ。

でこぼこはしていない。

「ねえクロおー今何時いー?」

「午前6時さ」

「ありがとう」

自転車の速度はものすごく速い。

車よりかは速い。

だからさっきまで見えなかったところも2分後くらいには見えてきたりする

「あ、めぐみーお国が見えるよ」

「ほんとだ。急ごうっ！朝ごはんはやくたべたいっ」

「急ぐ理由それかよっ！」

僕は速く自転車を走らせた。

ギアを変えて、もっと加速するようにした。

するとあっという間（1分くらい）で関所についた。

「旅人です。入国手続きを行いたいのですが・・・」

「ハイ、ワカリマシタ・タイザイキカント、オナマエヲ・・・」

「僕はキノ、そして腕時計のクロ。一人と一つで滞在期間は国には4日。町には1日です」

「ハイ。ワカリマシタ。モンヲアケマス」

機械が全部相手してくれた。

関所の門があくと、いつてらっしゃいませとも言ってくれた

「うひょー機械が関所を管理してるとはね」

「僕もびっくりしたよ。さしずめここは機械の国ってとこかなあ？
とりあえずこの関所のある町を見てみるか」

関所のある町はたいい首都かなにかだ。

それから郊外、山間部等々と言う感じなのだ。

「まずはあ・・・レストランだねっ！！」

「食えることしかないの？」

クロが呆れながら笑う。

だってぼくは食えることが好きなんだもん。仕方がないじゃないか
人間のさがってやつだ。

自転車を少し走らせると、おいしそうなレストランがあったので入
った。

「イラッシャイマセ」

「あ、どうも」「どうも」

「えっとえっと、ハンバーグとライスください」

するとほんとにすぐ

一分くらいで料理は運ばれてきた。厨房でも機械がやっているのだ
ろうか。

僕はその料理を勢い良く食べた。

「おいしいっ！！とても機械がやってるとは思えない繊細な味だあ
っ」

「食べれないおれにとっては嫌味でしかないんですけど」

「あのさぁ～おれっていうのやめない？キャラに合わないよ？」

僕は食べながらクロに文句を言った。

するとクロにも文句を言われた

食べながら喋るなよと。

僕はしばらく無言で夢中になって料理を食べた。

「ふう～・・・おいしかったぁ～つごちそうさまぁー」

「お代、置いておきますね」

すると、機械がやってきて、お代をうけとり

お皿を片付けだした。

「ほんとに機械の国だね。これは」

（機械の国）歴史本

「機械の国かあゝ人はいないのかな」

「さあーね。とりあえず見て回らないとわからない」

「そうだねえーとりあえずはこの街の沿革。歴史がわかるところに行きたい。あと図書館」

ぼくは自転車を念力で走らせながら喋る。

念力とはエスパーのことではなくエネルギーのことだ。

「歴史がわかるところねえー図書館には普通 国、町の歴史本があるから

まとめて図書館でいいんじゃない？」

「賛成。そうしようそのほうが手間が省けるし、ながく小説が読める」

僕はそう言って図書館を探すことにした

この町の看板はわかりやすく、宿屋なら「宿」レストランなら「食」と書かれている。

なんともわかりやすい。おそらくこれも機械がやっているのだろうか機械だからこういうわかりやすいのしか書けないのだろう。

人間は柔軟な発想力をお持ちだから

「図書館ーっどこだあーっ」

「もう、めぐみー 小説のことばかり考えてないで歴史本もちゃん

と読んでよ?」

「わかってるよ。クロ。僕の旅の目的はいろんな国、町を知り小説を書いてまわることだからね
歴史も知らないといけないし」

僕はしばらく自転車走らせた。

すると数分後に図書館の看板らしきものが見えた。

「本」と書いてある

僕は自転車ごと中にはいった

「うひょーひろいやあ」

「そうだね、クロ。これはおもしろそうだなあ〜1日でどれくらい読めるだろうか」

「わかってる?まずは歴史だからね?」

「はいはい。わかってるよ」

僕はものすごく広い図書館をぶらぶらして
歴史本コーナーを探した。

「ねえ、あれじゃない?歴史本コーナーって」

「ああーそれっぽいね」

なんか一つ古びた本ばかり入っている棚があったので
そこに行ってみた。

そこには予想通り「歴史本棚」とかかれていた

「とりあえず端っこから読んでいこう。棚がちっちゃいからすぐ終

わると思うし」

「そうだね、めぐみ読むのはやいもんね。」

僕はページをすらすらとめくっていった。
速読というやつだ。

そして数秒で自分の世界に入った。

「ねえめぐみ？ なにか印象的なあった？」

「めぐみ？」

クロが話しかけているということに全く気付かず
本を読んでいる。

「だめだこりゃ」

しばらく無言で読み続けた。

クロもがんばって読もうとしたけど読めない
クロには数字以外はよめないのだ。時計だしね
僕は飽きるまですつと読み続けていた。

そして1時間くらいたって読み終わった。

「さて次は小説だね」

「ちょっとーっ話してよーっどんなのかいてあったのーっ？」

（機械の国）機械しかないわけ

「じゃあ話すよ？この棚一体に書かれていたこと。」

「うん、なにになー？」

「この国は昔人々がたくさんくらしていたそうだと。もちろんこの関所の町でもね」

「うんうん」

僕は順を追って話すことにした。

速読をしていても内容はちゃんと理解できている。

「それで結構繁栄していたそうだよ。でも、ある日戦争がおこったらしい」

「へんそう？」

「せんそうだよ、クロ」

僕はかちつとクロをつめ先でたたいた。

まじめな話をしているのだからまじめに聞いてほしいものだ。

もっともクロはこれでまじめに聞いているつもりなのだけれど

「その戦争はとてもむごくてね人間と機械との戦争だったそうだと。」

戦争って言うても国と国じゃなくて国内だから、内乱だけだね。」

「先が読めてきた」

「たぶんクロの予想どおりさ。」

その内乱には機械が勝利し、国の町のうち3つは機械にのっとられて人は郊外に追いやられたらしい」

僕は持っていた本をパタンと閉じ

本棚に返した。

「はい、これがこの国のこの町が機械しかないわけだよ。わかった？」

「うん。わかった」

「そ。じゃあ小説を読もう。」

明日あさってしあさってでもうちよつと調べて行こうよ。人に聞いてね」

僕はまずライトノベルのコーナーに走った。

機械が館内では走るなど言っている。

そんなのわかってるけど、早くよまないとクロがうるさいから

「さあ〜と、読むかあーっ」

「アイデア思いついたら即書くんだよ？」

「わかってるよ、クロ」

僕はそれから数時間にわたって小説を読み漁った。
今度は速読は使わずゆっくりと

（機械の国）人間を求めて

僕たちは本を読むのをやめて
人間がいるという郊外に行くことにした

「めぐみくどれだけ走ったかなあ」

「さあーね町からずいぶん離れているみたいだ」

僕たちは自転車で数時間走っているけど

まだ人間は見えてこない。

後ろを振り返ってみても町はもう見えない
あたりに見えるのは一面の荒野だけ

「走りにくいね、この道。それにしても人間にはいつになったら会えるんだろう」

「確かに走りにくそうだね。」

「人間に会ったらいろいろ話したいのになあ
最近クロ以外の人とあんまりしゃべってないし」

「僕人じゃないけど？」

「ああーそうだったね」

僕はあたりを見回して

人間を探しながら歩いた。

数時間がたっただろう時に

クロが民家と思しき物を見つけた

「ねえめぐみくあれ民家じゃない？」

「ほんとだ。人の住んでいる気配がするね
よし、行ってみよう」

僕はその民家に行った。

そしてドアをノックして叫んだ

「すいませ〜ん！誰かいませんかあ〜！？旅の者ですけどー！」

・・・

しばらくの沈黙。

そして僕はドアが開いていることに気がついた。

恐る恐る入ってみたらそこには食べかけのご飯が並んでいた

「なにか不自然だね」

「ほんとにね」

（機械の国）人間

「誰だ!？」

「すいません。僕たちはあやしいものではなく、旅の者でして・・・
誰かいないのかなあーって思ったら開いていたので・・・」

「・・・そうか、ならいいんだ。」

僕の後ろに黒い服を着た男が立っていた。

男の形相はすぐくわばっていて、どこか様子が変。

「どうかしたんですか？それと、あなたはここの住人ですか？」

「あ、はい。そうですけど・・・？」

「では、何故こんな食べかけのまま放置しているんですか？」

「もったいないよね」

「そういう問題じゃなくてさ」

男は常に落ち着かない様子だ。

僕は自転車に腰かけて、男に質問を浴びせる

「それは…おれはもうここを出て行くこととしてたんだ。食べている
時に思いついてね。」

…というよりはあ、限界が来た。と言う方がいいかな」

「どういうことですか？限界が来たとは…」

「ここには機械ばかりしかいないだろう？」

「はい、でも郊外には人がいると聞きました。」

その通り。
まあ聞いたというよりは、読んだ。
のだけれど

「そう。郊外には人がいる。ただ…それももうおれだけさ」
「あの、よろしければ何があったのか教えてもらえませんか？」

「ああ、いいよ。あれは…
雪の降る寒い朝のことだった…」

（機械の国）人間（後書き）

はいw

なにかあつたんでしょーねー

つとw

いいませんよww
↑

（機械の国）ある寒い日の朝

ある寒い日の朝。それは突然やってきた。

何事もなく平和に暮らしていた家族のもとに、強風とともにやってきた

機械の集団。

俺達は必死になって逃げた。

食べかけのごちそうも、家の財産もすべて投げ出して命だけは助かろうと逃げた。

ただひたすらにみんな自分だけでも助かろうと、家族を蹴落としてまで

生き残ろうとした。だけど、それは機械達の前では無駄な抵抗だった。

あいつらは銃をぶっぱなして、俺らを殺していった。

俺は、物陰に隠れていて助かったのだが他の者はみんな死んでいった。

そして機械達はやがて俺を見つけ出した。そして、俺は近くにあったバイクで逃げた。

なぜか機械達は追ってこようとせず、街に引き返した。

そして、俺は山奥に疎開して今こっちに戻ってきたというわけだ。

???

「そんなことがあったんですかあ……」

「でも、なんでおつてこなかったんだろうね」

「それはわからない。だが、おそらく機械達はどうせこのまま放っておいても死ぬだろうと思ったんじゃないかと思う。」

「そうですか。お話、ありがとうございます。」

「え、あんたら、ちょっと話しに突っ込んだり、深く入り込んだりしないのか？」

「僕たちは旅の者ですから、深く出来事に干渉したりしてはいけないのです。決まりですから。一応」

「そうか。残念だ。もう行くのか？」

「はい。この国はもう見る物もなさそうですし」

「そうか。じゃあ、御達者で。」

「じゃ、行こうか」

「うん」

僕は自転車のバーを上げて、念力を注ぎ込むと

自転車を走らせた。

（走らせるといつても、自転車をこいでいるわけではなく滑って行っているといった感じだ）

草原の真ん中で

「ねえ、クロ」

「なに？」

「こんな広い草原の中で寝転んでると、いつかの日を思い出すね。」

「…そうだね。恵？なんかあったの？」

「いいや、なんにもないよ。ただ、うん。」

僕は空に手を伸ばして、歌を歌い始めた。

「またその歌？」

「またで悪い？」

「その歌本当に好きだよね」

「うん。だって、この歌は…」

僕は伸ばしていた手を地面につけた。

草のふわりという感触が僕の手を包む。

「ま、いいや。世界ってさ」

「ん？」

「どうしてこうも広いんだろうね。この草原を見てたらふと思った。」

「それは、僕にもわかんないよ。恵」

「そか。もっと旅していけば、わかるかな。」

「たぶんね」

「じゃあ、もう行こうか」

「うん。」

僕は自転車を走らせた（やっぱり滑るような感じだった）

草原の真ん中で（後書き）

さてと、ここで気付いた人もいるかも知ですけど
これ、話しの順番はばらばらですよーww

競い合い（二日目）

「すみません。旅人です。入国審査をお願いします」

「はいっ！ いやぁー歓迎だぁーっ 僕の時に旅人が来るとはっ」

「は、はぁ…」

「お名前は！？」

「僕は秋野 恵。この腕時計は相棒のクロ」

「よろしくー」

「はい、かしこまりました。恵さんとクロさんですね」

入国管理人は書類に名前を書き、門を開けます といって飛び出していった。

「ねえ、さっきの人なんであんなに興奮してたんだろうね」

「わからない。けど、旅人が珍しいとかじゃない？」

「そんな風には見えなかったけど？」

「そう？」

門が開いた。すると、入国管理人を含めるこの国の少なくともこの街全員と思われる人達が来てくれた。

—— 旅人さんっ！ ようこそーっ！ ——

全員が声をそろえて大声で言う。

「どうも。あの、すみませんが…安くて机がある宿屋はありませんか？」

〒〒〒〒〒

「ここはいいねー！ ベッドもふかふかだし、シャワーもあるし！
なんとたつて机にスタンドライトがあるじゃないかあっ！」

「恵、興奮しすぎだよ」

「だってだってーっ！こんな小説書きやすい宿屋なんて今まであつたかい？」

「なかったね」

「そうでしょーっ？」

「で、今日はどうするの？書いて寝る？」

「んーそうするよ。明日いろいろ見て回ることにするよ。」

「二つの街を一日で回ることになるよ？」

「かまわないさ。移動距離もさほどなさそうだしねー この地図をみると」

僕は机に向かって、ペンを走らせた。

「あーあ。僕はひまなんだけどなー恵いー」

（競い合い）2日目

2日目

僕は自転車を走らせていた。

とりあえずはこの町を見て回り、そして次の町へと行く。
それが今日のスケジュール。

「ねえ、恵いーあれはなんだろうね」

「ん？」

クロが言った先には大きな人ばかりが出来ていた。
僕はその中に行くと、その中心に居る人達に問う。

「何かが始まるんですか？」

「ああ、そうさ。今から俺らこの町と、隣町と、そのまた隣、そのまた隣。言ったら、国内での競い合いだ。」

「競い合い…ですか。 何で競うんですか？」

「それは、狩猟さ」

「狩猟…ですか」

「ああ、そうさ！ 一番多くの動物を殺した町が勝ちさ！ ちなみに競技者は町の代表者一名。」

男は、説明を興奮気味に語ると猟銃を取り出しそれを自慢気に語りだした。

僕はその自慢を聞き流す。

「でもそんな動物の命をもてあそぶようなことをして、罰が当たらない？」

「罰なんか当たるもんか！　これは列記としたスポーツだ！」

「さいですか、それじゃあ僕らは口出しをしません。その代りに、その競技…見せてもらえませんか？」

「いいとも！　きつと興奮すること間違いなしさっ！」

僕はその代表者達に付いていき、会場となるらしい森へと向かった。競技中は危ないから、バリケードの中から出るなと言われたので、おとなしくすることにした。

そして、審判らしき人が銃に火薬を積み、上に向けて…

——バン！——

と始まりの合図を鳴らした。

それと同時に代表者達は森に入る。そして次々と動物の悲鳴、銃の発砲音が聞こえる。

すると、バリケードが動き出して森の中へと入る。

「よく見えるようにするための仕掛けかな」

「だろうね。」

それから僕は黙って代表者が動物を殺す様を見続けた。

「ねえ、もう行くの？」

「ああ、これ以上見る物はなさそうだからね」

「じゃあ、この街でおしまい？」

「そうだね」

昔昔・a

今から17年くらい前

僕は、世界の醜さを知った。

喋る時計とはまだ出会っていなくて

ずっと独りだった

ずっと独りの僕

そんな僕に友達が出来た。

祐一君。

どこまでも優しくどこまでも明るかった

「なあ恵」

「んー？ なに？」

「今日は何して遊ぶ？」

「んー、そうだなあ… おにごっこ！」

「ああ、いいよ。じゃあ俺がおにな」

僕はおにごっこが大好きだった。

二人でおにごっこをするというのはだいぶ悲しいことだろうけど

僕にとってはとても、とても楽しい時間だった。

僕はこの時間も、祐一君のことも大好きだった。

毎日毎日草原でおにごっこや、かくれんぼ

けんけんぱーや、ゴム跳び。

この国のありとあらゆる遊びをやりつくした。

楽しかった。

ただ、楽しかった

夕日が沈むまで遊んでいた

夕日が、沈むまで…

昔昔・a（後書き）

さーてww

「b」はいつになるかな

最近これの更新ペースを落としてます

とはいうのも

他の作品よりも先に

この最後を知ってほしくはないからね

これはもうとつくに完結した話しだけれど

読んでくれるとありがたいです

丁寧な国

「ねえ恵い」

「ん？ 何だい？」

「これから行くところはどんなところなんだい？」

「なんでも、旅人の評判では”丁寧な国”と言われてるらしいよ」

「わぁーお！ それはいいやつ」

「そだね。期待しておこう」

自転車（本当に自分で転がる自転車。人間の体内にあるエネルギーを使うことで、少し浮き、摩擦ゼロを実現した自転車。バイクに相当する速さを出すことができる）を走らせて次の国へ向かう。

そして、数時間走らせると

関所が見えてきた。

入国審査手続きを簡単に済ませると、

「門が開きます」と機械の声がして、関所の門が開いた。

その技術に二人（厳密に言えば一人と一つ）は感嘆を漏らす。

そして、門が開ききると、中から大勢の人が見えて

「ようこそ！ 旅人さん」と丁寧にごあいさつをしてくれた。

「ありがとうございます」

「ありがとうー」

僕はいつも聞いている事を聞いた。

「すいません、ここに。。。はありませんか？」

「…ッな」

何故だか周りの空気が凍りつく。

そして、一瞬にして僕らを見る目が変わった。

どこか差別するような…いや、軽蔑するような…？
まあ、そのような眼に変わった。

「。。。ですって!？」

「なんて下品なやつだ!」

「え、いや。僕はただ。。。を探しているだけなのですが」

「ええい! こいつ、まだいうか!」

「僕は。。。や。。。に行きたいだけで。。。。。。。。。だけなんです」

「なんだこいつは! けがらわしい!」

「それ以上言うな! 帰れ!」

「そうだ! かーえーれー!」

「「「「かーえーれーかーえーれー!」」」」

「そうですか…では、失礼しました。今晚はこの国を出たところ
で。。。します」

「もう!! でてけーっ!!」

僕はその国を後にし、クロに一言。

「ほら、聞いてた通り。」

「ほんとだね、なんで。。。とか。。。とかで怒るんだろう」

「それは、きっと。。。。。。。。。からだよ」

花束

「…これ、やるよ」

「わあっ　うれしい！」

「そ、そうか？　ならよかった」

小さな小さなたんぽぽの花束を手渡す少年

少女はそれを受け取り、満足そうに笑う

少年は、それを見てほっとしたように肩を下す。

少女に恋する不器用な少年。

少年に恋する感情を隠しきれない少女。

全てが逆転するその日まで

この時は永遠だと思っていただろう。

。。。という名の少女は
それを信じていた。

少年はそんな少女を見て

少女のいぬ間に、

くすりくすりと笑う。

小説を書くことになったきっかけ。

旅に出ることにしたきっかけ。

。というあの少女はこの世の全てを見極めたかった
そして、話を作った。

いくつもの話

全ての根源が

ここに。

○という少女が書いた

日記…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9462k/>

世界ってすばらしいのかなあ？

2010年12月12日19時27分発行